

バブルへGO!! タイムマシンはドラム式

2006(平成18)年12月26日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督=馬場康夫/原作=ホイチョイ・プロダクションズ『気まぐれコンセプト』(小学館刊)
/出演=阿部寛/広末涼子/薬師丸ひろ子/吹石一恵/伊藤裕子/劇団ひとり/小木茂光/
伊武雅刀/森口博子(東宝配給/2006年日本映画/116分)

……「ニッポンを救う! タイムスリップ・ラブコメディ!!」が売りのバラエティー映画だが、その中には土地問題のエッセンスがいっぱい。その焦点は、1990年4月1日実施の不動産融資の総量規制! これによる土地バブルの崩壊は意外に早く、以降不良債権の発生、銀行や企業の倒産により、日本経済はガタガタに……。そして2007年の今、「もし、クレオパトラの鼻がもう少し低かったら……」と同じく、もし大蔵省によるあの発表がなかったら……? 物語の軸となる広末涼子に、阿部寛と薬師丸ひろ子が絡んでいく中、一体どんな風に日本国の未来を切り開いていくのだろうか……?

第4章

話題作ゾクゾク!

運命のあの日——1990年4月1日

1989(昭和64)年1月7日、昭和天皇が崩御し、わが国は「昭和」から「平成」の時代に入った。その年、12月29日の東証大納会は日経平均株価3万8915円87銭という史上最高値をつけた。そして1990年3月27日、大蔵省銀行局は不動産融資規制通達を銀行局長通達の形で出し、これを4月1日から導入した。これが、1983年以降の中曽根民活、アーバン・ルネッサンスのかけ声の元に始まった土地バブル対策の大きな転換点となったことはまちがいない。すなわち、土地バブル対策のためそれまでに立案された

- ①1987(昭和62)年10月16日閣議決定にかかる緊急土地対策要綱
 - ②1988(昭和63)年6月28日閣議決定にかかる総合土地対策要綱
- によっても、容易に食い止めることができなかった地価の上昇が、この不動産融

資の総量規制によって一気に緩和され、次第に沈静化し、そしてこれまで日本人が誰も経験したことがない地価下落という方向にわが国が進んでいくことになったのだ。

映画は、この不動産融資の総量規制を1990年3月某日、大蔵省金融局長の芹沢良道（伊武雅刀）が記者会見で発表するところからスタートするが……。

日本国崩壊のシナリオを国の予算から……

2006年9月26日に安倍内閣が発足してから早3カ月。12月25日には総額を約82兆円とする2007年度予算政府案が閣議決定された。景気の回復、法人税収入の伸びを受けて国債発行額が25兆4320億円となり、過去最大の減額（4兆5410億円）になるなど、国債発行額を30兆円に抑えるという公約をなかなか実現できなかった小泉内閣に比べると一見大幅に改善したように見える。しかし、国の借金体質には何ら変更はなく、今や国だけで547兆円、地方の借金を合わせると773兆円に達する勢い。ちなみに、1997年度末は492兆円だったから、10年間で1.6倍に膨らんだことになる。さらに、12月26日付朝日新聞は、「財務省は25日、国債や借入金など国の借金残高が9月末時点で827兆9166億円と過去最大を更新したと発表した」と報道した。これによると、「赤ちゃんからお年寄りまで含む国民1人あたりの借金は約648万円の計算になる」とのことだ。

下川路らの危機感の内容は……？

この映画では、「バブル崩壊後の景気対策のために雪だるま式に増えた国の借金は800兆円。しかも金利で毎日900億円ずつ膨らんでいる」とその危機感を訴えているが、まさに2007年の現実はそのとおりというわけだ。

そして現在、財務省大臣官房経済政策課のしもかわ じいさお下川路 功（阿部寛）とその同僚、菅井拓朗（小木茂光）らのチームの試算によると、少子高齢化が進み、人口が減り始めていく中、「この先2年のうちに大手銀行・大企業の連鎖的倒産が始まり、貧富の差は更に拡大。多数の失業者と治安の悪化……日本経済の破綻、国家の崩壊は目前に迫っている」とのこと。さあ、えらいことだが、この予想が的中する確率は……？

下川路チームの極秘計画とは……？

こんな悲観的な日本経済崩壊のシナリオを描くのは、この映画における下川路だけではなく、浅井隆氏の『国家破産サバイバル読本 上』『国家破産サバイバル読本 下』そして『最後の2年 2007年からはじまる国家破産時代をどう生き残るか』などもその立場……。安倍内閣は2011年度に、基礎的財政収支＝プライマリーバランスを黒字化するという公約の実現に向けて財政構造改革を目指すとともに、現在「上げ潮路線」をとっている。それが成功して、こんな悲観的シナリオを打ち砕いてくれれば1番いいのだが……。

日本経済の崩壊を阻止するための具体的な処方箋を描くことができない下川路らは、唯一実現可能性のある何とも奇想天外な計画を極秘に進めていた。それはバブル崩壊——不良債権の発生——金融機関の倒産——企業の倒産という最悪のシナリオの引き金となった、あの1990年3月某日の不動産融資の総量規制の発表をやめさせること。そのためには、やっと完成したばかりのタイムマシンに乗って2007年から1990年にタイムスリップし、その発表がまちがった道であると説得すること。その大切な使命を担ったのは、タイムマシンの発明者である田中真理子（薬師丸ひろ子）だったが……。

広末涼子と薬師丸ひろ子が娘と母に……

この映画の主人公は、久々に映画に主演する広末涼子。広末涼子扮する田中真弓が下川路を知ったのは、真弓の母親真理子の葬儀の場。というよりも、下川路が真理子の葬儀に行き、はじめて独身の真理子にこんな大きな娘がいたことを知ったわけだ。下川路の調べたところによると、真弓は母親の真理子から独立して男と同棲し、玉枝（森口博子）が経営する六本木のキャバクラに勤めているという、今ドキよくあるパターンのオンナ……。

他方、真理子は下川路と共に極秘チームの任務につき、洗濯機型タイムマシンの開発に成功した研究者。そして、不動産融資の総量規制の発表を阻止すべく1990年の時代にタイムスリップしたのはよかったものの、東京で行方不明となったため、やむなく下川路たちが真理子の死亡をデッチあげたのだった。ところが、

その真理子にこんな娘がいる。すると、タイムスリップ作戦を打ち切る必要はない。そう考えた下川路は作戦を真弓に話す決心を……。さて、下川路からそんな夢みたいな話を聞いた真弓はそれをどう受け止めるのだろうか……？

真弓の任務は……？

もし下川路の作戦に協力するとすれば、真弓の任務は明らか。それは1990年の東京にタイムスリップして、第1に、まだ生きている母親真理子を探すこと。そして第2に、真理子と共に不動産融資の総量規制の発表を阻止すること。しかし、真弓は、既に逃げてしまった元カレの200万円の借金のためにサラ金の取立屋田島圭一（劇団ひとり）から追われているという低レベルのオンナ……？ したがって、下川路がいくら日本経済の危機や不動産融資の総量規制の誤りを説明しても、全然わかっちゃいないはず……。

しかし、真弓の母親探しの一念は強く、下川路の説得によってついにタイムスリップを決意。さあ、そんな真弓が見る、バブル景気に浮かれた1990年の東京とは……？

2007年 vs.1990年

2007年から1990年にタイムスリップした真弓がはじめて目にしたのは、建設中の巨大なレインボーブリッジの姿。これが、土建国家ニッポンの土地バブルの1つの象徴だった……。

団塊世代の私が体験したバブル景気の時代の様子を、この映画は実にうまく表現してくれている。六本木のまちといえ今はキャバクラだが、あの時代はディスコ。そして女の子の服装は、今はヘソ出しルックのジーパンだが、あの時代はワンレンでボディコンスーツ。また、今はケチケチクリスマスだが、あの時代はクリスマスイブともなると、ホテルのスイートルームから埋まっていったもの。そして飲み屋街は人であふれ、深夜から明け方までタクシー待ちの行列ができていた。さらにこの映画によると、普通の学生たちがクルーザーでパーティーを開き、ドンペリを惜しげもなく抜いていたとのことだが、大阪に住んでいた私は、残念ながらそんな東京のお坊っちゃまの楽しむ姿は見たことがない……。それは

ともかく、2007年 vs.1990年は、あらゆる面において対比してみると面白い日本の姿。ちなみに、あの時代に流れていた名曲は、私が今でも時々歌っているプリンセス・プリンセスの『Diamonds』であり、リンドバークの『今すぐ Kiss Me』だった……。

1990年の下川路の姿は……？

下川路からすべての作戦を聞かされた真弓は、タイムスリップの前に、「1990年の東京に到着したら下川路に会えるのか」と尋ねたのは当然だが、それに対する答えは、「あの時代の俺は危険だから会わない方がいい」という意外なもの。真弓に対して日本経済崩壊のシナリオを語る白髪まじりの下川路は、財務省の官僚ながらその執務室（？）は地下にあるうえ、口数も少なくどちらかというと陰気なおじさん。そんな下川路が、1990年の俺は危険とは一体どういう意味……？

1990年にタイムスリップしてきた真弓が見た若き日の彼は、バリバリの東大出の大蔵省の高級官僚ながら、実はプレイボーイで軽薄な遊び人の下川路だった。どうも上司である芹沢の秘書高橋裕子（伊藤裕子）は彼の恋人の1人（？）のようで、勤務中堂々と「昨日、待っていたのにどうしてこなかったの……」と甘えられる始末。これに対するプレイボーイの答えは、「約束はしたけど、守るとは言っていなかったヨ」というもの……。

こんな下川路だから、タイムスリップのこと、母親探しのこと、記者会見阻止のことなど、2007年の下川路から聞いた話を懸命に語る真弓に対する下川路の興味は、あくまでプレイボーイ的視点のみ……？ そんな下川路に真弓はうんざりしながら、タイムスリップについていくつかの動かざる証拠を突きつけると……。

真理子は一体どこに……？

下川路が真弓からの話を聞き、少しずつ状況を理解していったのはさすがだが、下川路がそんな目で周りを見ると、どうも芹沢の様子がおかしい……。なぜなら、「真理子が訪ねてきたでしょう！」と迫る真弓に対して、芹沢は頑強にそれを否定するばかりか、「怪しそうな奴はみんな警察に引き渡せ」と強硬に命令するから……。そこで始まったのが、下川路+真弓チームによる真理子探しの探偵ごっ

こ……。そんな場合、役に立つのが下川路の持つ有力な(?)情報網。真理子が警察に留置されているとの情報を掴んだ2人は、直ちに警察に向かったが、そこで聞かされたのは「1時間前に釈放されました」ということ。さて、一体誰が真理子を釈放したの……。そして、真理子はこれからどこへ行き、何をしようとしているの……?

17年前の真理子は……?

2007年から1990年にタイムスリップしてきた真理子がいることと、1990年の今を生きているホンモノの真理子がいることは、タイムスリップ理論上全く矛盾しないはず……?

もともと下川路と真理子は東大の同級生で、下川路は官僚の道に、真理子は民間会社に就職したのだが、実は2人は恋人同士……。1990年当時の下川路は、当然真理子に子供がいることなど全く知らなかったもの。ところが、真理子の娘と称する真弓が突然2007年からタイムスリップしてきたため、1990年の下川路が1990年の真理子に対して娘のことを尋ねると、真理子はあっさりと告白……。そして、さすが東大卒の才媛らしく、「あなたに子供のことで頼る気持など全くなかったのよ」ときた。すると、昨日までモノにしようと狙っていたあの変わった女の子は俺の子……。そう気づいたプレイボーイ下川路の変わり身の早さはお見事で、これもさすが東大卒……。あれや、これやタイムスリップモノらしく、ややこしく入り組んだお話がいっぱい……。

やっぱりハゲタカファンドが……

都市問題をライフワークとしている私にとって、土地問題はその中の1つの重要な分野。そんな私が土地バブルと不良債権について教科書的に使用し、学生たちにも薦めているのが、西村吉正著『金融行政の敗因』(1999年・文藝春秋)。西村氏は1963年に大蔵省に入省し、1989年に銀行局審議官、1994年に銀行局長をつとめた「ミスター大蔵省」。1985年の「プラザ合意」による各国の協調利下げとその後の1ドル150円に至る急激な円高の進行が、日本経済に大きな打撃を及ぼしたことは明らかだが、他方で1987年10月のブラックマンデーに端を発した「ア

「アメリカ発世界恐慌」の恐れは、世界注目の的となった。

一方、2006年に大問題となったライブドアや村上ファンドが、アメリカのファンドと手を結んでいたことは明らかどころ。また、2001年4月に始まった小泉改革の知恵袋となった竹中平蔵氏の経済路線が、アメリカのハゲタカファンドを呼び込むものという批判を浴びたことも記憶に新しいところ。すると、1990年当時もアメリカのハゲタカファンドが……？ その実態はわからないが、この映画では何とそのアメリカのハゲタカファンドが、芹沢が召集した料亭に大集合……。

新米リポーターが大手柄……

2007年の今は「ハチテレビ」のベテラン・リポーターとなっている宮崎薫（吹石一恵）は、1990年当時は突撃取材が売りの新米リポーター。太眉・ワンレン・ボディコン姿で夜な夜な六本木のディスコにくり出していた彼女が、恋の駆け引きをしていたお相手が下川路……。お馴染みのギャグ(?)を連発しながらくり上げられる男女の恋の駆け引きに興味のある人は、それを楽しんでもらえばいいのだが、ホントの面白さは実はそれではない。宮崎が真の役割を発揮するのは、2007年からタイムスリップしてきた少女真弓の独占取材。そしてそれを続けていく中、何と料亭の中でくり上げられた特大スクープを実況中継する結果になったこと。彼女のリポーター活動によって、日本国の運命は大きく変わることになったのだ……。

もしあの発表がなかったら……？

「もし、クレオパトラの鼻がもう少し低かったら……」という壮大な「イフ」はありえないことだが、架空の物語としては結構面白い面も……。それと同じように、再検討の結果、不動産融資の総量規制はあまりにも急激に地価の上昇をストップさせる劇薬だから、逆に銀行の不良債権を発生させ、銀行や企業の倒産を招く恐れを過小評価しているとの結論となり、もし1990年4月1日から不動産融資の総量規制を実施してなかったとしたら……？

そんな仮定であれば、1990年から17年後の2007年、日本は一体どんな国になっているのだろうか……？

この映画は喜劇風に……

この映画が描く、そんな壮大な「イフ」の姿はあまりにも喜劇風……。すなわち、やっと2007年の時代にタイムスリップして戻ってきた真弓と真理子が見たのは、あの下川路が総理大臣に就任しているという信じられない姿。そして、何と菅井は官房長官に、田島は秘書官をしていたから驚き……。他方、総理公用車の中から見る東京のまちの風景は……。それは映画を観てのお楽しみだが、1つだけ象徴的な姿を指摘すれば、レインボーブリッジが何と4本も建設されていること。そして東京のまちは、品川再開発に湧いている現状をはるかに超えて、超高層ビルが林立……。これは、土地バブルの崩壊も不良債権の発生もなく、順調に日本経済の成長が続いていることの結果だが、さて、こんなうまい話がホントにあるのだろうか……。映画は映画として楽しみ、その後はひとりひとり現実の2007年との相違点をしっかりと検討してみたいもの……。そしてその検討の視点はもちろん、どちらの方が国民は幸せか、ということだが……。

土地問題と時代考証の教科書にピッタリ……

この映画は、ホイチョイ・プロダクションズの面白い原作に目をつけたフジテレビなどが製作したバラエティー映画。それは「ニッポンを救う！ タイムスリップ・ラブコメディ!!」と表現されていることから明らかだが、私にとっては意外にそうでもなく、真面目に教科書として使える映画。それは、土地政策と日本経済浮沈のターニングポイントとなった1990年4月1日の不動産融資の総量規制に焦点をあてて、真面目な(?)問題提起をしているから……。それがホントに日本にとって重要な分岐点だったことは、この評論を読めばわかるはず……。

他方、娯楽映画としてもこの映画は一級品。それは、若者向けには2007年の今の貧乏くさい生活と、1990年の華やかな暮らしを対比できる楽しさがあるから。またそれは、若者ばかりではなく、1990年を20代、30代、40代で過ごした大人たちも同じ。なぜなら、文化、風俗、音楽、ファッションその他、2007年と1990年をあらゆる視点で時代考証するのは、結構楽しいはずだから。したがって、この映画は土地問題と時代考証の教科書にピッタリ……。2006(平成18)年12月27日記